

東国文化自由研究レポート



研究テーマ

なぜ古墳時代に群馬が
栄えたのか



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校

/ 年 / 組 3 / 番

氏名 大和 優真

(返却希望)

1、調査の動機や目的

古墳時代の群馬は関東の中で最も栄えている県だと歴史の授業で聞いたことがあるが、今の群馬は関東1栄えていると呼べるような県ではない。どうやって最先端の技術手に入れていたか、なぜ古墳時代の群馬は栄えていたのか、どのようにして栄えていたのかと不思議に思い調べてみようと思ったため。

2、調査方法や内容

- ① 古墳や博物館へ行く
実際に古墳や博物館へ行き古墳や古墳時代の群馬がどのようなものだったのかこの目で確かめるため。
- ② パンフレットや本で見て確かめる
博物館で売っていた古墳時代の群馬についての本や博物館に置いてあったパンフレットを見て調べ実際に行ってだけでは分からなかったことを調べる。
- ③ ネットで調べる
①と②だと分からなかったことを調べる。

3、調査の結果と考察

- ① 古墳や博物館へ行く
＜群馬歴史博物館＞
博物館の展示室には数多くの展示品がありました。
その中には国宝の「挂甲の武人」があり細かい部分までしっかりと再現されていました。

「挂甲の武人」とは初めて国宝認定された埴輪で、高さは1.31mあり、6世紀後半に造られた非常に精巧な埴輪である。甲冑を身にまとい大刀と弓を持っている。同じような埴輪は、県東部を中心に複数出土していて、国指定重要文化財となっているものもあるが、その中でも、この武人埴輪は特に細部まで丁寧に表現され、美術的にも評価が高いものである。



挂甲の武人



綿貫観音山古墳の埴輪たち

博物館には他にもたくさんの埴輪がありました。入口付近にあった、この埴輪たちがすぐに目に留まりました。埴輪の中には帽子の形をしたものや鶏の形をした埴輪がありおもしろかったです。その埴輪たちは綿貫観音古墳から出てきたものが多かったのです。綿貫観音古墳について調べてみました。

すると.....

- ◎綿貫観音山古墳の埴輪は、種類・量ともに極めて豊富な事が最大の特徴である。
- ◎種類としては、円筒埴輪(含む朝顔形)と形象埴輪(家・器財・人物・動物)がある。
- ◎樹立場所は、後円部から前方部にかけての墳頂部と墳丘第1段上面(基壇面)である。
- ◎墳頂部では、家形埴輪が後円部・前方部の両方から複数出土しており、加えて、後円部には大刀・盾・靱等が中心部を取り囲むように置かれていた。

などのことがわかりました。

綿貫観音山古墳は群馬一の古墳なのでスケールが違うなと思いました。



保渡田八幡塚古墳

上の画像は八幡塚古墳のものです。八幡塚古墳は保渡田古墳群のうちのひとつで特徴は前方後円墳の周りに小さな円墳がある事です。この保渡田古墳群には他に井出双子山古墳、保渡薬師塚古墳があります。どの古墳も100m前後のもので3基近接して築かれた例は東日本では群馬県の保渡田古墳群だけなのです。

下の画像は埴輪劇場です。これも八幡塚古墳にあるものです。埴輪劇場とは54体の人物や動物の埴輪が密集しています。埴輪劇場には「豪族の儀式」や「狩り」などがあります。「鶉飼い」という非常に珍しいものもあつたとのことなのです。



八幡塚古墳(54体の埴輪で7つのシーンが表現されている)

博物館で不思議に思ったことがありました。それは動物の埴輪は馬のものが多くあるということです。展示室内には人の埴輪や家の埴輪などがありましたがそれはどれも王のために必要なものなのです。つまり馬は王にとって必要不可欠なものだったのではないかと思いました。

馬の埴輪が多数出土

本で調べてみると「群馬県内で多数出土した馬型埴輪は450例以上といわれ、全国的に見ても非常に豊富な数量を誇っている。」とありました。他には「5世紀中頃の人物・動物埴輪の登場から6世紀まで、人物埴輪の横には馬の埴輪が置かれることが多かった。」「他の動物と比較しても馬の埴輪は圧倒的に多く、その数は90%を占める。」とありました。

では、なぜ馬の埴輪はこれほど多く作られたのかと疑問に思いました。



飾り馬と馬ひき(歴史博物館展示)



歴史博物館のデジタル展示室では
360度から埴輪が見られる。

そもそも「馬」はどこから来たのかということが疑問でした。調べると「邪馬台国の女王卑弥呼の事が記されている3世紀ころの歴史書には、日本には馬や牛はいないと記されている。5世紀になって、渡来人とともに大陸から日本にやってきたとされており、まずは当時の政治の中心だった近畿地方に伝えられた。」とあったので群馬の地域は、この頃すでに全国でも屈指の有力地域だった。近畿地方に馬が伝わってほどなくして、5世紀後半には伝えられたと推測されます。

なぜ馬の飼育が盛んになったのか

奈良・平安時代には、群馬の地域はたくさんの馬を生産して中央政府に献上するまでになる。この地が国内屈指の馬の生産地になった決め手として、以下のような点が挙げられる。

- ア. 馬の飼育や生産の最新技術を持った渡来系の技術者集団の存在
- イ. 馬の土地に適した土地が広がっていた

群馬の地域では、古墳の副葬品に、轡や杏葉などの馬具が見られるようになることから、5世紀後半には群馬の地域に馬が普及していたと考えられる。

また、6世紀後半の榛名山の大噴火の際に降った軽石や火山灰に覆われた渋川市の白井地区にある遺跡からは、無数の馬の蹄跡が発見され、ここでかなり大規模に馬が飼育されていたことが分かっている。

馬が特別だった理由

当時の馬は、移動・運搬手段、情報伝達や農耕の労働力として、大変重要かつ貴重なものだった。さらに、古墳時代の各地の首長にとって、馬は財力や富をアピールするためにぜひとも手に入れたい特別な価値のある動物だったのだ。古墳時代の群馬の地域には馬がたくさんいて、馬の出産によって数を増やすことが盛んに行われていた。

古墳時代の群馬の地域は、東国文化の中心地として繁栄を遂げたが、その原動力の一つには馬の存在があったと言える。そして農業生産力の向上と、現代につながる交通の要衝の地であること等により、群馬が全国屈指の有力地域になっていった。

このように、多くの放牧地で馬が飼育され、馬の生産が盛んだったという事実と、財力や権威の象徴であった馬の豊かなイメージは後の『群馬』の名前の由来になったと言われている。

馬型埴輪が多い理由

埴輪の作られた目的は「被葬者の生前の活躍ぶりや財力の誇示」であるので、当時最先端の特別な動物だった馬の埴輪は古墳に欠かせない存在にされていた。さらに当時の群馬の地域は、数多くの馬形埴輪が並べられたというわけだ。

馬がきらびやかな理由

馬形埴輪をみると、きらびやかな金具やすずなど、たくさんの飾りを身につけていたことが分かる。実際に古墳から出土した馬の飾りにもそうしたものが多く、当時貴重だった馬が目立つように、目いっぱい飾り立てて、それらをキラキラ光らせながら儀式に参加させていたことがわかる。

きらびやかな馬具

馬具は本来人が乗るために馬の各所に装着するもので、手綱やくらなど、本来は実用性の高い道具であるが、古墳からは埴輪で表現されたような、様々な装飾を施した馬具が、被葬者の傍らに添えられた。古墳における副葬品とは、「被葬者が来世に向かうときに添える厳選された品々」であるので、このラインナップに馬具が加わることは、馬具が特別な存在であることがわかります。

バラエティ豊かな馬形埴輪

たくさんの馬が飼育され馬が身近な存在であった群馬県では、飾り馬のほかに、鞍をつけない裸馬や人を背中に乗せた馬など、様々な姿の馬型埴輪が出土している。

人が乗った馬形埴輪は、全国で20例ほどしかない珍しいもので、さらに盛装した人が乗った埴輪は群馬に2体あるだけ。埴輪から、威風堂々とした姿で儀式に加わる様子が想像できる。



馬型埴輪の例

村の発展

馬が群馬の豪族とかかわりが深かった事は分ったが、村はどのように発展していったのだろうか。

群馬は山が多く古墳時代は火山の噴火が相次いでいたという。だが土地や多くの川に恵まれているこの地では作物がととも育ちやすかった。なので火山があるだけではあまり生活に変化はなかった。しかし火山の噴火による火山灰で家や作物が埋もれてしまい全く生活ができなくなってしまった。群馬の人たちはそれだけではくじけない。下の図から見て分かるように、なんと火山灰で埋もれてしまった畑の上に新たに水田を作ってしまったのだ。



台地の上の土地を水田に作り替えていくためには、標高の高い上流から長い水路を引いてくる必要があった。これにはとても高度の土木技術が必要だったがしっかりと成し遂げられていた。この技術にも驚かされるが、作業を継続していくためには膨大な労働力が必要だ。だから古墳時代の群馬には、各地に豊かな経済力と技術力を兼ね

備えた豪族のもとで、多くの人々が養われていたと考えられる。このことから群馬は豪族によって安定していることが分かった。

川の道から陸の道へ

他にも群馬県が栄えた理由はいくつかある。そのうちのひとつとして「道」がある。日本列島をつなぐ広域的な道は、古代の道づくりとともに整備されていった。ヤマト王権は、各地の豪族とのネットワークを形成するために、人・物・文化などを介して積極的な交流を展開した。群馬県での古墳時代に始まり頃に発達したのは、「川の道」だ。群馬県では古墳文化が栄え始める背景には、東海地方からの人々の移住や技術の導入による平野部の開発がある。昔の利根川は東京湾に流れ出ていたため、おそらく太平洋から利根川をさかのぼってやってきたものと思われる。利根川は、東国における産業・交通を支えた大動脈だったのだ。

その後、5世紀初めごろまでに朝鮮半島から伝わった馬文化は、5世紀後半には群馬県にも伝わった。馬は、軍事・輸送・農耕など手段として大変貴重であり、その普及とともに陸上交通が重視され、山や川を越えていく「陸の道」が整備されていったのであろう。畿内からみると群馬県は東国、そして、広大な関東平野の入口入口にあたる交通の要地だったのだ。このように群馬は水・陸の道が交わる地理的な特色を持っていて、先進的な技術や文化がいち早く伝えられた。これが古代東国文化の中心として栄えた群馬を生み出したのである。

4、考察

古墳時代、群馬が栄えた理由について

- ・馬の生産が盛んだったこと
- ・土地が良かったこと
- ・統治していた豪族によって村が発展していったこと

この3つのことから群馬県は発展していったのだと私は考えます。

まとめ

私は群馬は関東最大の古墳大国だったことは知っていましたが群馬の豪族たちが周囲の村をまとめ災害の復興をしていた事は初耳でした。群馬が先進国になれたのは豪族たちの判断力や行動力が優れていたからだと思います。

夏休みを利用して、昔社会科の教師をしていた祖父の解説付きで古墳や博物館巡りをしました。祖父の話はとても興味深く、大変勉強になりました。

今回、東国文化について調べたことで、私は古墳を見に行くことがとても楽しみになりました。群馬にはとても多くの古墳がありますが、これからも祖父と一緒にたくさん見て回りたいと思いました。



参考文献・参考資料

- 『東国文化副読本』
- 『群馬県立歴史博物館リーフレット』
- 『綿貫観音山古墳リーフレット』